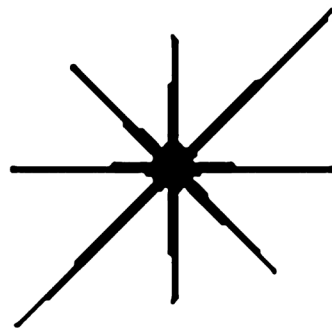


# コメット通信 27

[’22年10月号特別付録2]



*comet book club*

éds. de la rose des vents - suiseisha

# 変声譚 1

中村邦生

## 月光の仕事——はじまり

月の光に酔うことはあるのだろうか。

埼玉との県境に近い東京郊外の地下の居室、「土龍庵」<sup>もぐらあん</sup>。照明を落とすと、外から月の薄明かりが差しこんでくる。

窓の正面のドライエリアの壁に黒黴が広がっているはずなのだが、夜闇に溶けている。壁の上の植え込みに繁る粗樫<sup>あらかし</sup>の枝から月の光が細く洩れ、風の動きに合わせて明滅を繰り返す。

庵主の作家Nは、枝の隙間を見つめ、光のありかを辿っていくうちに、身体がほてり、軽い酔いに似た気分になった。やはり月の光は心身に障るのだ。

初秋の某日、深夜1時13分、スタンドライトの明かりを戻し、朦朧となりかかる意識をおしのけ、Nは自著の『ブラック・ノート抄』と『幽明譚』を読み返し始めた。近く開かれる「移動幻想」をテーマとするシンポジウムの課題図書になっていたからだ。ところが、たちまち気持ちがざわついた。予想通りと言うべきか、意想外と言うべきか定かではないのだが、再読という、停滞と漂流とが重層し交錯するような「移動」の感覚とともに、作中の登場者たちが、いたるページで新たな声を発し始めたのだ。しかも、ページから逸脱した未知の声も湧き出してくる。むしろこちらの新参者の方がやっかいで、入り乱れて唐突に出没するのだ。

どのように応じたらいいのか途惑っていると、ページを開いたまま、幸か不幸かいつしかNは睡魔に引き込まれ、意識は薄闇の中を当て所なくさまようことになった。さまようと言っても、ゆるやかな動きではなく、ときに疾走感がともなう。それは記憶に潜む怖ろしい感覚でもあった。深夜、高速道路の長いトンネルを猛スピードで走り抜けるときに起きる錯覚だ。同走の車はない。トンネル内の明かりは次々と線条となって伸び、背後に飛び去っていく。すると出口がいつまでも不明のまま道は垂直に傾き、車ごと底深い穴に落ちていく感覚が襲う。しかも全身に貼りつくその失墜感は怖ろしさのみならず、夢を誘い出す愉楽の働きもあるのだ。

そんな思いに翻弄されている間、「目覚めよ」という低い歌声に似た囁きや、誰かの擬声のような語りかけが、頭の芯のほうから聞こえたように感じた。

どれほど長く続いた微睡みかは判らないが、目覚めの岸辺に行き着いたとき、気分のたかぶりと居眠りへの自責が入り混じって眠気は遠ざかり、頭がどんどんさえてきてしまった。

掛時計を見ると、午前1時2分、なぜか時間が戻っている。木彫の古い時計ではあるが狂ったことはない。電池切れであるにしても、時刻表示が逆流することはないだろう。いやいや、冷静に考えないといけない。Nははやる気持ちを抑えると、ふいに思い当たった。

時間は丸一日過ぎたのではないか。眠りは長々と続き、おびただしい夢を見た気もするし、ほとんど仮死状態に近い時間を過ごした朧げな空漠の感覚もある。だが、繰り返し聞こえたあの声は何であったのか。記憶をたどるにも、何も手掛かりはなく、胸苦しくなるばかりだった。

Nは気を落ち着け、ふたたび『ブラック・ノート抄』を開いた。すると、再読を試みたときの事態

がエコーのように反復してきた。活字を追う目が上滑りし始め、代わりに各断章が、「我に語らせよ」と次々と前日譚やら後日譚などを話し始め、はてさて、それら作中人物を押しつけて、未登場の者たちが我先に次々と声を上げ出したのだ。その声は地下室に満ち、蝟集し、湧き出し、共鳴し、狂奔し、收拾がつかなくなった。その夜、土龍庵はさまざまな由来を持つ声の参集地、廃棄地、あるいは再現の場になった。と同時に、一人の人間が声色を使い、腹話術でも楽しんでいるのではないかという印象もかすかに頭をかすめた。束の間そう思ったのは、やはり月の光にたぶらかされていたせいかもしれない。それもまた、月の仕事の一つなのだ。

Nはそんなふうに思いめぐらせ、声の行列に対応していたが、何が言いたいのか掴みがたい錯雑とした話に耳を傾けているうちに、これもまた眠りの一隅の出来事のように感じられてきたのだった。

## 1 自転車の練習が先だ

夏目金之助が、かく語る。

——報知したいと思う事は多々あるような無いような気もするが、何れにしても愚痴めいた瑣言さげんとなろう。兎に角大体の処かくがご承知の如き俗物だから、こんな窮屈な暮しを続けていると英吉利が嫌になって早く帰りたくなるのも道理だ。真冬の夜のヒューヒュー風が吹く時にでもなれば、ストーヴからもくもくと烟りが逆戻りして室の中が煤だらけになって噎むせてしまったり、窓の隙間から寒風が無遠慮はいりこに這込んで体が堪らなく冷え切ってしまったら、板張の椅子が自棄やけに堅い代物で尻が痺れて痛苦が腰に及んだり、自分の着物が段々と変色して来るにつれて我身が次第に下落するような情けない心地に相成り、何のためにこんな貧賤ひんけんの生活を送るのかと矢鱈やたらと憤慨至極に到ったりするのである。それではと憂さ晴らしに、ステッキを振り回してバタシー公園辺りまで散歩したりするのだが、往來に出て見れば、逢う奴も逢う奴も皆んな厭せいが高い。御負おまけに愛嬌のない顔ばかりだ。こんな連中の国なら、無駄な脊の高さと辛気臭い顔貌との二つが揃っている奴らには特別税でも掛けたらいいかと思う。元来、脳味噌の中身の薄っぺらな軽い輩こそ無駄に脊が伸びるものである。何事も重石を欠いてはならないのだ。併し乍らぶつくさと愚痴言を吐いても仕方ない。当地にいる以上は万事鷹揚おもしろに平気にしていなければなるまい。たまには美術館巡遊や芝居だけでなく音楽会などの興行物に足を運ぶのも好いかもしれぬ。丁度稽古を終えた時に、クレイグ先生からグレン・グールドと云う若いピアニストがセント・マーチン・イン・ザ・フィールズ教会でリサイタルを開くそうだから行って見たらどうかと教示された。プログラムは知らないが、たぶん当日決めるのだろうと。そうした類の変物演奏家なのだそうだ。心に懸かる処おもしろがあつて調べて見ると、意外にもこのピアニストは白面郎はくめんろうながら、余が何れ書くことに成るはずの『草枕』の英語訳版の愛読者だった。そうと知れば行くべきか。今般の音楽会の様子を知れば、これも何れ書くことに成る『野分』の上野奏楽堂のコンサート風景の内習うちならしになるかもしれぬ。しかもこのピアニストは興趣溢れる奇行の持ち主で、椅子を極端に低くしないと弾けず、自分用の特製物を持ち歩いて居るとの事だ。何やらよく知られたジョージ・セル事件なる逸話もあるらしい。ジョージ・セル指揮によるクーリヴランド交響楽団との共演のリハーサルでの事、若者はいつもながらの強い拘りで椅子の高さに神経を集中し、何と一ミリ単位での微調整を続けた。謹厳で時間管理に五月蠅いセルは指揮台の上から険しい顔を向けで、こう宣わたったという。「ミスター・グールド、私が個人的に君の尻を16分の1インチ、スライスして差し上げようか。そうすりゃ君は望み通りの低い姿勢が得られるし、我々は練習が始められる」。こうした奇矯に加え、このピアニストは聴衆の面前で演奏するのには否定的な考えを持ち、いつ何時我等から姿を晦くらますか分からないら

しい。そんな御仁が何故に『草枕』を後生大事に愛読していたのか不可解だ。不可解と余が述べたときには、大体が不愉快とほぼ同義に理解して貰っても好いのだが、この場合そこまで窮屈になる事もないだろう。英語訳がThe Three-Cornered World(『三角の世界』)となれば薄々見当がつかない事もない。「四角な世界から常識と名のつく、一角を摩滅して、三角のうちに住むのを芸術家と呼んでもよかろう」と書くはずの辺りであろう。アラン・ターニー氏が充てた「非人情」のdetachment(超然)という訳語からも仄かに推考できる。ならば、リサイタルに出掛けるのも一興ではないかと小生はしばし迷う羽目になった。いやしかし実の処、代銭に余裕を欠いている。少しでも書物に工面の方策を講ずることが先決だ。其も其も余には只今のところ喫緊の課題を抱え、それに全力を結集しなければならぬ労苦を要する事情がある。自転車乗りを是が非とも克服する事なのだ。練習は毎日続けては居るが、完成は未だしの感がある。下宿の婆さんのミス・リールの「自転車に御乗んなさい」の命に従ったものの、習熟は遠き途なり。倫敦はなんと剣呑な所であろうか、大落五度小落はその数を知らず、石垣にぶつかって向脛を創傷し、立木に突き当たって生爪を剥がし、ラベンダー・ヒルの坂道を疾風の如く転がり、自転車は無理情死を逼る勢いで止まる景色がなく、板塀にぶつかって逆戻り、危うく巡査を轢くところだったが、無暗に人を馬鹿にする婆さんの手前もあり、この戦はまだ降参する訳にはいかない。兎に角、精魂尽き果てるまで自転車の練習が先なのだ。勿論、我武者羅な振舞いにも節度なるものがある。然り乍らこんな事では道を謬る。明日から心を入れ換えて勉強専門の事が肝要と思う。しかし、思量はくるくる変転するようだが、音楽会に出向く位の寛裕はなければならぬ心境の切実はあるにせよ、初めての事となれば好奇と億劫との聞き合い、どのような結論に達するか未決であるが、余の著述の熱心な若き読者には相済まないが、心境を遠望するに現今のところやはりこのグールド氏の演奏会には行かない公算が勝って居る。

## 2 お席を用意しておきます

グレン・グールドが、かく語る。

——あのナツメさんに今度の演奏会の話が伝わっているとは驚きです。何しろ公式記録に残るはずもない、欠食児童のためのひっそりしたチャリティー・リサイタルですから。教会のチャリティー賛助関係者の縁でグレイグ氏に伝わったのでしょうか。

それにしても、『三角の世界』の作者のナツメさんが私のリサイタルにおいでになるとは、望外の喜びです。時空を超えた奇特な配剤によるものと思えません。言うまでもなく、あの本は私にとって人生最高の一冊です。読めもしないのに、日本語の原書も所有していました。残念なことに、書き込みをしたアラン・ターニー訳の英語版はバリで盗難にあってしまったこともあり、どこに心惹かれ、何を感じ、何を考えたのか、もはや細かく復元はできませんが、青年画家のこんな感慨を咄く一節など目を凝らして読んだと思うのですが、さてどうだったか。原文はこのようなになっています。

〈茫茫たる薄墨色の世界を、幾条の銀箭が斜めに走る中を、ひたぶるに濡れて行くわれを、われならぬ人の姿と思へば、詩にもなる、句にも詠まれる。有体なる己れを忘れ尽して純客観に眼をつくる時、始めてわれは画中の人物として、自然の景物と美しき調和を保つ。〉

ここには「有体なる己れを忘れ尽して純客観に眼をつくる」こと、この超然たる第三者的な立場に「非人情」のエッセンスがあるのでしょうか。これをいかに内面化していくか……。いや、ちょっとお待ちください。何やら、身体が冷えてきた。

Achoo! Achoo! Achoo! アチュウ! アチュウ! アチュウ! はくしょん! はくしょん! はくしょん!

すいません。急に寒気がして。でも、くしゃみが出る程度なら、まだ深刻じゃありません。それにしても、皆さんよくシャツ一枚でいられますね。夏だから当然ですか。私の寒がりには有名みたいで、私はこうしてセーターを着ていても、寒いときがあります。ですから、マフラーを巻くことにします。握手なんか求められるのも実に苦手です。たまたま冷たい手なんかに触れると、背筋までぞくつとしますから。でも、演奏直前に洗面器のお湯で手を温めているのは、そうした理由よりも、手の硬直を緩めるためです。手袋をしたままピアノを弾いたことだってありますが、それは冷感のせいです。

何の話でしたっけ? そう、リサイタルのことでした。失礼、ナツメさんは、いらっしゃるとまだ決めていなかったのですよね。西洋古典音楽を愛好するお弟子のテラダ・トラヒコさんとはまだお知り合いになってはいないにせよ、演奏会にはご興味があるはずですよ。

プログラムですが、いくつかは考えています。ハイドンの後期ソナタ 59 番、モーツアルトのソナタ 13 番、ベートーヴェンの後期のソナタ 30, 31, 32 番とかですが、バッハはどうするか、どのみち気が変わるかもしれません。後半のプログラムはベートーヴェンになりますけど、30 番作品 109 は恐ろしい瞬間があるので、楽しみになさってください。終楽章の第 5 変奏の途中で、6 度を保ったまま瞬時に複雑な運指をしなければならぬ難所があって、この瞬間になると、どのピアニストもスリリングな体験を余儀なくされ、ジョナサン・コット氏によるインタビュー『グレン・グールドは語る』でも述べましたが、燃えさかる納屋から救出される馬のようになり、恐怖が顔に出るのです。私はそこをどのような方法で克服したか、まあ、それはそれとして、この部分をカットして演奏するか、誰も持っていない自筆譜を知っているふりをして弾くか、小賢しい回避の方法も頭をかすめました。

でも、私が気まぐれな人間とは思わないでいただきたいのです。とりわけよく指摘される演奏上の内声部の強調は、決して恣意的なものではありません。もちろん私は内声部に焦点を合わせるのは楽しく、遊びとして実践するのも好きなのですが、これは構造上の要請です。上声部で起きていること以上に内声部を強調したくなるのは、そうした理由です。音楽の魅力は多声的な要素にあり、常に複数の声の響きにあるものです。だからと言って、私の悪名高い演奏中の鼻歌や歌声までポリフォニーに寄与しているなどは決して思いませんけど。ここで待ちだすのは場違いかもしれませんけど、ナツメさんの『三角の世界』にも、多彩な声があって、主旋律ではない内声部のようなところに作品全体を充実させる固有の魅力がありはしませんか。最初のあたりのページに出てくる、菜の花畑の空を上昇していくヒバリと下降していくヒバリが十文字にすれちがいがながら鳴き交わす声のシーンだって、それを感じます。

ところで話は変わりますが、ジョージ・セル事件に触れておられましたね。私としては「またそのことか」と苦笑してしまうのです。これも先のジョナサン・コットのインタビューの本で詳しく述べていますが、『タイム』誌がいい加減な情報を載せてから、各誌が次々と愚劣な内容に増幅させて報じました。私は冗談好きの人間ですが、この間違った逸話は気分が悪かったです。しかし、真相が明らかになって、元の情報の発信源はジョージ・セル本人だったのです。謹厳厳格な指揮者が記者の求めに応じて、つい冗談のリップサービスをしてしまったのでしょうか。これは皮肉にも生真面目さの故に生ずる気遣いのふるまいとも言えるのでしょうか。

私もまた生真面目と言うか、誰かが指摘したように強迫的なパーソナリティーの人間かもしれません。でも、そうした気質とユーモア感覚が共存しているところが特徴かもしれません。断定はできませんが、ことによるとナツメさんも、そうしたパーソナリティーの持ち主ではありませんか。私の場

合、扮装も好きなんですよ、ええ、そう、仮装です。実在の人物もあれば架空の人物になりきることもあります。口真似も得意ですし、声色を使って音楽を論じたり、パロディ的な文も書きました。「ピアノによるベートーヴェンの第5交響曲の架空批評4編」など、面白く書いているように感じています。イギリスの『フォノグラム』誌、『ミュンヘン音楽協会報』、『ノース・ダコダ精神科医協会紀要』、『ブタペスト音楽労働者総同盟新聞』からの採録という趣向です。私の特技は、擬態や擬声、要するに腹話術なのだと思います。

私のリサイタル、いらっしゃるかどうかわからないとのことですが、いちおうお席は用意しておきます。当日、気が向きましたらおいでください。先ほども申し上げたとおり、闘技場にも思える公開コンサートは、遠くない将来にドロップアウトする決意です。ロビーの受付でマネージャーのホンバーガーという者を呼び出してください。彼がご案内すると思います。ご留学中の身、もちろんご無理を重ねることは禁物です。

### 3 あの少年のことは、よく覚えている

カマキリが、かく語る。

——私か？ 私はあなたがた人間がカマキリと呼んでいる虫だけど、文句を言わせてもらえば、この呼び名は少しばかり紛らわしいわけで、アユカケの別称で、カマキリと名のついた川魚もいるし、私たちによく似ているらしいカマキリモドキという気の毒な名前の虫もいるけど、「モドキ」とはいつたい何事だろうね、それは「まがいもの」という意味なんだろうし、どうせなら、ちゃんとした呼称を考えなきゃ可哀そうだよ、なぜって、こっちの方こそ、あちらさんの「モドキ」かもしれないし、そもそも「モドキ」は崇高な言葉のはずなのよ、さっきどこからか、「擬態」なる言葉が聞こえたけど、それだよ、私たちの巧みな「擬態」に比べたら、あんたがたの「擬態」なんか、笑止千万の代物じゃないか。

ここで声色を変えますよ、仲間のカマキリたちは関心がないでしょうけど、<sup>こわっ</sup>声作りだって、擬態のレッスンになるかもしれないですから、言い遅れましたけど、俺は73年も生き長らえているカマキリなんですけど、稀少種もいいところで、俺を含めて地球上に3匹しかおらんのですよ、なぜ生き残ったか、偉大な理由はありますけど、偉大なことは<sup>もったい</sup>勿体をつけて話すにかぎりますので、後回しにすることにいたします、なぜこうして今まかり出たかと言いますと、あの孤独な5歳の少年が愛おしく、なつかしく、出会いの情景をありありと思いだしたからで、それは「亀とカマキリの虚構論——ある回想」とタイトルのある土龍庵の作家Nの文中で、俺の若い時分に触れていたこともあって、じんわりと思いついたのですが、その文章を誰が書いたかはどうでもよく、どうせ今は少年の面影などとっくに全滅させ、皆無、荒れ果てた顔をさらす御仁になっているに決まっているでしょうから、そんなやつ、しっ、しっ、あっちに行けというわけで、とりあえず5歳の坊やだけを思い出したいのでして、それですからこの文の前半の亀さんの話は、まことに残念ですが引っ込んでいただくことにしますけど、いや、この亀さんもいづれ何か話したすかもしれないですよ、でも、それはわかりませんし、余計なお世話というものでしょう、で、少年のことですが、あのとき驚いたのは、むしろこっちのほうだったんですよ。

少年は杉並区荻窪の「西田町」とかつて呼んでいた場所の大きな家の庭を独り占めして遊んでいた

のだが、何度か謎の光景を目撃し、樹皮の荒さから推測して、たぶんクヌギに間違いなく、その幹の二又に分かれているところに小さな突起があり、そこへ下から黒蟻が上ってくると、細枝がすばやく伸びて蟻の姿が消えてしまったそうだが、しかし、瞬間のことで少年は何が起こったか判らないまま立ち去り、ややあって戻ると妙な動きを見せていた枝は消えていたというわけだ、で、さらに別の日に彼は蝶を追っていき、何という花だったか、美しい桜色の花びらにガクの白い蕾が開きかかり、その花に蛭蝶が止まったのだが、瞬間、花びらの一枚から針のようなものが出て、青い翅が引き寄せられ、ゆるりと折りたたまれるように見えたんだけど、何が起こったか、この場合も判らないまま、少年は口外してはならない庭の秘密の出来事として心の奥にしまいこみ、それから何年もたってから、正体はカマキリで、その身に備わった巧みな「擬態」だと知るにいたったのである。

なりきり、溶け込み、まぎれ、惑わす、こうした変身はコノハムシとかバツタとか昆虫類の特技なのですが、とりわけカマキリはカモフラージュの天才で、荻窪の庭で五歳の少年を騙したのは、何を隠そうこの俺なんですけど、そのこと覚えていますよ、いきなり不思議そうな顔が間近に寄ってきて、不可解な魔法の出来事に少年は驚いていましたが、こちらからしますと、これほど人間の顔をまじまじと見るのは初めてでしたから、目鼻の妙な配置に俺の方がびっくりしてしまいまして、正直言うと、そのせいでいつもの手順がやや狂ったのですが、何とか首尾よく捕獲はできて、ちょっと余裕が出たところで、改めて少年の顔を覗くと、目がキラキラ光っていて、これは危ないぞと心配になったわけは、俺たちの天敵の鳥どもは光っているものを見るとすぐ突く習性があるって、ポタンなんかだっただけで危ないわけで、ましてや目玉なんか格好の標的、鶏なんかにも顔を近づけるのは、用心、用心、と、ころであのときオデコに大きな絆創膏を2枚も貼っていましたが、今更ですけど、何があったんでしょうか、これは先の文章でぜんぜん触れていませんでしたが、とにかく少年は不思議なマジックに驚いていましたけど、その不思議な出来事を「擬態」という言葉を知らずに、そのまま受け入れていたときの世界に対する好奇の感覚は、今よりもずっとしなやかで豊かだったように俺は思うのです。

カマキリに関して、Nは「カマキリ賛、または未完の虚構論」というエッセイも書いておるようだが、この「賛」なる言葉のこそばゆく、まぶしいことは脇におくとして、少年が少年らしさを脱しつつあった小学校高学年の頃の出来事だったか、『幽明譚』の「ホーム・カミング」にも出てこない逸話を書いてあるね、母子ホームの24時間腹ペコの欠食少年たちが、カマキリを甘辛に煮付けて食べたそうじゃないか、ならば「カマキリ賛」じゃなくて「カマキリ惨」と言ってほしかったね、で、食べた後で年長の中学生から、「大きいカマキリには寄生虫がいるので、小さい個体を選べ」とサバイバル知識を伝授されたが、時すでに遅し、腹の中でカマキリたちが、いっせいに鎌を構えてうごめく情景を思い浮かべてしまい、気分が悪くなったそうだけど、その程度で終わってよかったではないか、寄生虫は小さいやつでも入り込んでいるからね、それとあなた方の生物学者は「婚姻贈呈」という用語も使っているな、オスがメスに気づかれぬように、そっと背後から近づいて交尾を試みるものの、事に及ぶ前に察知されて喰われてしまう残念なオスもいるんだが、首尾よく交尾をはたしても、しょせん結果は同じで、安らかに喰われ、自らの体を大事な子育ての栄養源としてメスに贈与するのだけど、これこそ己の死を捧げる究極のプレゼントなんだが、この俺がなんで73年も生き延びてきたかと言えば、この「婚姻贈呈」を回避し続けてきたからさ、ありていに言えば、メスとの交尾をいっさい体験してこなかったわけで、それを「婚姻童貞」なんて無理な言い方をしてもかまわないのであるが、とにかく長命はそうしたさっぱりした日々を頑張りぬいた賜物だよ、偉大なことさ、交尾を拒否

する、そんな健気な生き方をしてきたカマキリは、さっきも述べたように、現存するのは3匹しかいないのさ、3匹の反贈呈同盟の絆は固いよ、でも、驚くのは早い、俺たちカマキリの騙しの妙技はここに留まらないのだが、にわか空腹を覚えたので、話すのは今度にするかな、今度の機会が本当にやってくればの話だけど、話はいつだって話半分にすぎず、どこまで行っても話は話にならないのだ。

#### 4 何たる醜態、痴態であったことか

インド更紗が、かく語る

——稀少カマキリ殿の70年余の長命が偉大ならば、17世紀以前のものだと国立博物館の技官から鑑定を受けた己は歴史に名を刻んでも恥じない存在かもしれないぞ。申し遅れたが、それがしは作家Nによる『ブラック・ノート抄』の「更紗さらさら、どこからどこへ」に登場したインド更紗でござる。それがし、東インド会社に運ばれたりしつつ、あちらこちらへと奇異な漂流の歴史があり、先の本でござるかと思うが、花と蔓が絡み合った約15ミリ幅のボーダー部分を切り取られ、村山槐多の「湖水の女」の額縁の溝に、その花模様の更紗が埋め込まれた逸話も持つものである。それがしの細い布切れの収まった当の額縁と絵は箱根のポーラ美術館で再会できるので喜ばしいことである。残った布、即ちそれがしは、額装されて「土龍庵」の地下の壁にかかっているのだが、「おい、たまには埃くらい払ったらどうだ」と文句をつけたい程度不満で時を過ごしてきたところである。

しかしながら、『ブラック・ノート抄』には書かれていない話もあり、忘れてもらっては困るのだ。それがしには中央で断ち切られた半身があつて、行方知れず、もはやこの世には存在しないであろう。

いつの時代であったか、たぶん19世紀中葉だったと思う。それがしたちはマカオの媚薬専門の薬師宅のテーブルの上にあつたのだ。ある日の夜、「新薬お試し会」とかで、いささか自信のない男どもが大勢集められた。もちろん、お相手の美女たちも薬師の特別な計らいで、別室に待機していたのだ。新たに開発した媚薬催淫剤の成分は、先のカマキリ殿と同様、それがしには無縁の毎日とはいえ、頭にこびりつき、おおよそ暗唱できるのである。

アブラナ科の根菜植物のマカを基本に、高麗人参、ロクジョウ（鹿茸）、カイクジン（海狗腎）、オウセイ（黄精）、チンピ（陳皮）、カシュウ（何首烏）、トウキ（当帰）、トカゲ（蜥蜴）、センキュウ（川芎）、タクシャ（沢瀉）、ゴミシ（五味子）、ハンピ（反鼻）、モッコウ（木香）、コウモリ（蝙蝠）、ブクリョウ（茯苓）、ジョテイシ（女亭子）……、それと決定的なエキスがあつたが、もういいだろう。

幸か不幸か、効果は絶倫至高の狂乱の様相を呈したのである。自信欠落、劣等感に打ちひしがれていた男どもが情火の炎の化身となって、妖麗極まる美妓、艶女たちが登場するや、我先に飛びかかり、押し倒し、それがしたちが微睡んでいたテーブルの上に引き上げ、阿鼻叫喚の乱交の徹夜祭の惨状が続いたのである。女たちも怒号にも聞こえるマカ不思議な歓喜の叫びをあげる有りさま。人間どもの何たる醜態、痴態であったことか。

悲惨であったのは、テーブル上のインド更紗だ。半身が狂乱の愚昧至極の人間どもの劣情暴発の犠牲になったのである。可哀そうなことに、花柄の美しい更紗の半身は、人間どもがのたうちながら垂れ流した、わけのわからぬ粘液にすっかり汚されてしまった。更紗は半分に断ち切られ、その後の運命は不明のまま。たぶん処分されてしまったのであろう。それがしもまた半身になったが、毒液の被害は免れた。言うまでもなく、心中は複雑、ときに嵐が起こる。

以上、「更紗さらさら、どこからどこへ」のサイドストーリーとして、それがし、この更紗自ら声を発した次第である。合掌。



## 5 この二人、なんだか変わった人たちね

——作家ノブさんが語る

いいです、ノブさんで。故郷の岐阜ではノブサと呼ばれたりしたのだが、郷の人間以外から言われることはないで、すこし居心地が悪いふうがないこともない。しかし、それはどうでもいいことで、むしろなんであれ違和感というものは小説を書く動機とかネライにすらなったりするとはいえ、そんなバカバカしいほど単純なことをわざわざ口にするということもないわけで、そもそもあらかじめ感じていた違和感など、小説にならない。『抱擁家族』にしても『別れる理由』にしても『残光』にしても、書きながら違和感に出会い、ぶつかり、うろたえ、のたうつ、そんな感じのものなんです。何が言いたいのか。私がたびたび繰り返すように、どうもあなたには悪い癖があると思ってしまう。自分で掘った落とし穴にはまっている。いつも言っているとおり、あなたは批評的な言葉とか決まり文句とか、ちょっとばかり気の利いた言いまわしを思いつくと、それに引きずられて、結論らしきことをすぐに言いたがり、得意になる。しかし、それじゃ先がなくなるはずだ。なんでそんなに括り言葉にこだわるのかね。けっきょくククルはめになってしまうのは、自分の首の方だと私は思わざるを得ない。頭がそのように動くのだから仕方ないにしても、結論めいたことに近づきそうになったら、避けるというよりも、むしろ壊して素知らぬ顔をして通り過ぎるくらいのことをしないとダメだと思いますよ。

いや、言いたいのはこんなことじゃなかった。私のかつての小説のタイトルを使えば「静温な日々」とでもなるかもしれぬ、ここは時間がいつまでも淡々と流れていて、これはこれで願ってもないことだが、いざ何か書こうとすると、さてどうしたものか。ふと思いかすめる旅の話が、何より心動く。これは私らしいやり方かどうかとは別の問題になるだろうが。

それで前にあなたが書いたアイルランドの旅の話さね、さっき不意に思い出した。あのときのことは、私も家内もよく覚えていることで、ただ同じ記憶を共有しているわけじゃなく、ちょっと食い違ふところも当然だがある。あなたが書いていたのは、どんなふうなことだったか？ 本を追分の山荘に置いてきてしまったので、うろ覚えのまま思い出してみるところなんだが、そういえば、この「うろ覚え」が私の小説の作法の一つとあなたは述べたことがあった。私はしばしば忘れたふりをして、とぼけて、「うろ覚え」を装っているとかなんとか。事実をわざと忘れたふりをして、「うろ覚え」でおす、とあなたは指摘した。それはそうかもしれぬが、私は現実に記憶なんか消えてしまって、忘れておるのです。だから、実際のところあなたの指摘とは逆とも言えるわけだ。

忘れていたことをとぼけて知っているふりをするときに、「うろ覚え」を装うことになる。人間の偽装的な振る舞いなど、心のうちに入り組んだ面倒臭い、そのつど揺れ動く現実があるということですよ。

何の話だったか？ そう、アイルランドの旅の話だ。あのとき、ダブリンの街をどこに向かって歩いていたのかね。リフィー川の夕景を見に行くにはまだ早い時間で、とにかく街を歩くこと自体が何とも気持ちたかぶる経験だったと今にして思う。中心街から少し外れた街路を進むと工事現場にさしかかった。見上げると、クレーンが鉄骨を持ち上げて、歩道の上の方までせり出して、ぶらぶら揺れていた。日本なら交通整理員でも出て、注意をうながすだろうが、そんなこともなく、とにかく危なっかしく宙にぶらぶらして、それを私らは何か気をひかれるところがあって、眺めていた。そうだったはずだ。

するとあなたは、「何にせよ宙づり状態のものは、心ひかれるというか、思いをあれこれ刺戟する

ところがありますね」とつぶやいた。すぐに文学のことだけでなく、人間の存在そのものにも話を及ぼしそうな雲行きを感じて私は警戒した。それでも、なんともボンヨウなものになるしかないコメントに感染してしまい、そのような言い方をしきりにしたがる人間がすぐに思い浮んで、いくら頭の中とはいえ、気分のいいアイルランドの街歩きにまで、そんな人物を同伴させるのは愉快でないとは強く反省した。そのとたん、ポロリと当の人物の名前が出てきてしまった。もちろん、あなたは何のことか気づかないまま、いや、判っていて気づかないフリをしていただいただけかもしれないが、相変わらず歩道の上空に揺れる鉄骨を二人で見つめていたんだと思う。

ちょうどそのときだったか、5時の終業のサイレンが街に鳴り響いた。するとあきれたことに、工事人は歩道の真上に鉄骨をぶら下げたまま、作業を終えてしまった。あと1分もクレーンの作動を継続すれば、安全を確保できるというのに、何たることか。そこで中断したのは、たぶんユニオンとの労働協定を守って、きっかり5時に仕事を終えるためだ、というのが、あなたの説明した理由だった。たぶんそのとおりだったのだろう。私はこの杓子定規な作業手順に、あきれながらも面白みを覚えたのだが、あなたは黙って、まだ宙を見ていた。それでよかった。規則を守ることは、いつだって不条理な判断を含んでいる、などと出来そこないのアフォリズムめいたことを口走らなくて、なおよかった。

二人そろって、「わけがわからないけど、面白いねー」といった思いを胸にしまって、ただ佇んでいただけだったが、いやー、こうして話しているだけでも、楽しい旅行だったと思うね。そうそう、我々二人の様子をずっと観察していた家内は、一言何とつぶやいたか。あなたも書いていたと思うが、「この二人、なんだか変わった人たちね」というものだった。こうした言い方は家内の特徴なんで気にしないでいいのだが、なぜかあなたは、ちょっと動揺したように見えた。違うかね？ これだって、あんがい入り組んだあれこれ面倒な理由がありそうじゃないか。いや、しかし、遠い昔のことだし、私も家内もあなたとは幽明境をこえたところにいるわけだから、いちいち生真面目に記憶を掘りこすこともないだろう。それにしてもこの日にオコンネル橋から眺めたリフィー川の夕映えだけは、いつでも記憶から甦らせたいものだ。川をわたる風が水面のさざ波に一つ一つ光を運んできた、あの黄昏の時間と丸ごを甦らせたい、と私は思う。

執筆者について――

中村邦生（なかむらくにお） 1946年生まれ。小説家。大東文化大学名誉教授。小社刊行の主な小説には、『チェーホフの夜』（2009年）、『転落譚』（2011年）、『幽明譚』、『ブラック・ノート抄』（いずれも2022年）などが、批評には、『未完の小島信夫』（共著、2009年）がある。